

縁日が開かれる当日は弘法さんの縁日と同様、参道や御前通^{おんまえどおり}近辺には多くの露店が立ち並び、終日活気にあふれており、今出川通りからもその活気が感じられる。天神さんは骨董品と古着の露店が多く集まることで有名であり、なかでも、1月の初天神と12月の終い天神は特に多数の参詣客で賑わいをみせる。

弘法さん、天神さんの両縁日が張り合うことから、「弘法さんの日が雨なら天神さんの日は晴れる」などといわれている。

立ち並ぶ多くの露天の活気が、北野天満宮といった歴史的に価値の高い建造物を中心とする周辺の北野界わいの歴史的な町家群等の町並みに溢れ出している。



写真2-71 天神さん

イ 歴史を刻んだ市場・市に見る歴史的風致

このように、京都の長い歴史の中で形成されてきた市場や市は、今もなお活気を保ち続けており、客と店員が声を張り上げながら会話する姿や、独特の香りは、今も昔も変わらない市の歴史と力強さを感じる。そして、その活気ある様子が周辺からも見て取れ、人々の心を浮き立たせ、さらに人々を市の中へと誘い込む。また、これらの歴史ある市場や市では、扱われているものも伝統や歴史を感じさせるものが多く、一層風情を引き立てている。

これらの市場・市の営みは、中心となっている寺社や歴史的な町並みとともに、訪れる人々に、歴史とともに積み重ねられてきた市場や市の歴史を感じさせてくれる。

(3) もてなしのまち・花街^{かがい}

京都には、上七軒、祇園甲部、祇園東、宮川町、先斗町^{ほんとうちょう}の五つの花街がある。ここでは、京都独自の洗練されたもてなしの文化が受け継がれ、息づいている。芸妓や舞妓の立ち居振る舞い、洗練された和装姿、それらは全てもてなしの文化が形となって現れたものである。

この項では、まず京都の花街の概要を説明したのち、花街の「をどり」などを題材に、もてなしのまち花街の歴史的風致を示していく。

ア 京都の花街



図2-43 京都の五花街

京都の花街の多くは、近世初頭頃から、北野社や祇園社、清水寺といった地域の神社仏閣へ参詣する人々に茶をもてなす水茶屋が起源となっており、発祥したものである。現在は五花街となっているが、平成8年までは島原にもお茶屋組合や歌舞練場があった。

花街には、芸妓や舞妓が生活する置屋^{おきや}（京都では屋形と呼ばれる。）と、座敷で客人に舞や音曲を披露し、酒席の空間を提供する「お茶屋」があり、屋形がお茶屋を兼ねているところもある。芸妓や舞妓は、屋形で生活し、芸事等の稽古は、各花街の学校や検番などで行なっている。

このような学校は、芸妓や舞妓が花街の外で働こうとした際に困らないよう手に職をつけたた